中部

ナゴヤが生んだ 名企業

第6部 トヨタの支え手②

◆名脇役

小島プレス どんな部品でも一つ欠ければ車はできない

——豊田喜一郎

見えないニーズを発掘

「スマートフォンの充電は『非接触型』がいい。それと運転中に充電器から滑り落ちないようにできないのか」。自動車の樹脂部品を手掛ける小島プレス工業専務の鈴木司（58）が昨年夏、アラブ首長国連邦（UAE）など3カ国を訪問した際、現地で耳にしたのは意外な要望だった。

中東を訪れたのは、同社が部品を納めているトヨタ自動車の大型車の改良に備え、現地の声を聞くためだった。特に運転席の周辺でスマホの充電に使うUSBポートの取り付け場所を探るつもりだった。

ところが中東ではスマホを台座に載せる非接触型の充電が主流。自ら現地を調査し、トヨタも気付かないニーズを発掘することで「部品を提案する時の説得力が全然違う」と鈴木は話す。

小島プレスは車の内外装に使う樹脂部品などをトヨタに納める。売上高は1500億円ほどで、約3万社ある系列部品メーカーの一つにみえる。だがトヨタの関係は別格とされている。

80年の付き合い

2月11日に静岡県湖西市で開かれたトヨタグループ創始者、豊田佐吉の生誕150年記念式典に小島プレス社長の小島洋一郎（69）の姿があった。グループ直系の企業以外で招かれた取引先はごくわずかだ。

両社の付き合いは、小島プレス創業者の小島浜吉が1937年、自動車事業を興した豊田喜一郎から直接、ワッシャーを受注することから始まる。蚊取り線香などを作っていた浜吉が「うちも自動車部品を作れないか」と、9カ月にわたって日参した結果だ。

太平洋戦争末期の45年3月、小島プレスはトヨタの支援を得て、名古屋市から挙母町（現豊田市）に疎開する。約40日をかけて引っ越しをした直後、元の工場が空襲で全焼する。こうした命拾いの経験も両社をより強く結びつけた。

「トヨタを中心にわたしたちが手足となり、日本の自動車工業を確立しましょう」。戦時中の資材不足や工場疎開などに対応するため、浜吉は部品各社に協力組織の結成を呼び掛ける。43年に「協豊会」が発足し、浜吉が初代副会長（会長はトヨタ出身）に就く。

協豊会には現在、部品メーカー224社が加盟する。トヨタとは二人三脚の関係で、競争力の源泉となった。浜吉の孫の洋一郎は「トヨタに工業化のノウハウを教わる教育の場だったのが、徐々に会員からも知恵を出す双方向の関係に変わった」と解説する。

自動車産業はいま、電気自動車の台頭など激変のさなかにある。動力源が電動化してエンジンの需要が減れば、生き残れない部品メーカーも出てくる懸念もある。ある協豊会の幹部は「2次、3次のサプライヤーにも再編が波及する可能性がある」と指摘する。

「クモの糸」提供

クモの巣状の座面と背もたれが乗員の荷重を分散し、運転の負担を軽減する——。トヨタが昨年秋のパリ国際自動車ショーで公開したレクサス用のコンセプト座席だ。バイオベンチャーのスパイバー（山形県鶴岡市）が素材の人工合成クモ糸繊維を提供した。

この繊維事業を支えているのが小島プレスだ。2014年にスパイバーと共同出資会社を設立し、量産の研究を進める。実用化にはまだ時間がかかるが、鉄を超える強度とナイロンより高い伸縮性は、クルマ作りを変える可能性を秘める。

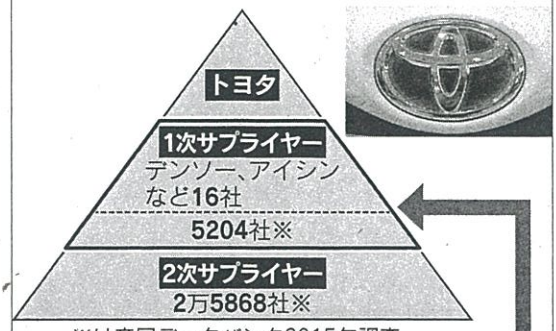
洋一郎は「上流（＝素材開発）に足を踏み出した」と意義を強調する。金属部品のプレス加工から始まった自動車部品事業は現在、売上高の8割を樹脂部品が占める。扱う素材の進化と共に成長してきたが、これからは遺伝子工学などを扱う世界に突き進む。

自動車市場で変革の荒波がうねりを増す中で、部品各社はトヨタの庇護（ひご）に安住せず、成長に挑む気概を求められている。

（敬称略）

＝小島洋一郎社長のインタビューを電子版に

強い結束を誇る〝二豊会〟



※は帝国データバンク2015年調査

	協豊会	栄豊会
社数	224社	126社
業種	部品	設備・施設、物流
発足	1943年	1962年
会長	信元久隆氏（曙ブレーキ会長）	永井淳氏（新東工業社長）
主な企業	三五 小島プレス工業 大橋鉄工 メイドー など	フタバ産業 鬼頭工業 明治電機工業 など

☎ 名古屋 052-243-3321
岐阜 058-262-4847
津 059-228-3365